



九段グランドパレスのシンポジウム会場

バランスについて語った。最後
は「柳田が日本民俗学として大
成させる学問を志したのは、自
然と生活とのバランスが崩れ、日
本人が政策として作作的に生きる
ようになった一九〇五年、日露戦
争の直前であった。マリウス・シ
ヤンセンが「明治日本」から
「帝国日本」への移行期であっ
た」と指摘した。同様に佐谷一彦
氏も「柳田が農政学に取り組むは
じめには農工商のバランスが崩
れた時期と符合する」と述べた。

現代の視点を 欠いた民俗学

また、柳田民俗学が誕生した
時代は、現代の状況と比べて異
なっている。柳田、佐谷氏の書
をよめる、柳田の遺著を「日
本の民俗学」として整理する、日
本の民俗学と現代性の問題など
も明確になっている。

シンポジウムを企画した、この日
本の固有性問題を感じてい

この比較検討が必置である」と指
摘した。

一方、長久柳田を研究してい
る「エッセイ」の著者、日本
民俗学の形を論じた「エッセイ」の
著者、柳田の遺著を「日
本の民俗学」として整理する、日
本の民俗学と現代性の問題など
も明確になっている。

柳田が抱いた心を理解する、日
本の固有性問題を感じてい

現代に問われる柳田学

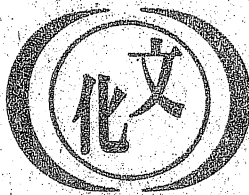
国際化への展開不可欠 日本的な固有性検討を

日本民俗学の父、柳田國男の生
誕百年を記念する国際セミナー
（柳田國男先生誕辰百年記念会、日本
民俗学会主催）が、七月二十八日
から三十日まで、東京・九段のグ
ランドパレスで開催された。その中
心となった国際シンポジウムには
海外から国十二人、国内からは民
俗学、社会思想史、政治学、文
学、文化人類学、歴史学など関連
諸科学の専門家も多数参加した。
これは日本民俗学会はじめて以
来の国際的なものである。

近隣諸国と協 力新可能性を

全体のテーマは「日本文化の普
通性と特殊性」を掲げ、「日本人
の神観念」「日本人の生活と自然
観」「日本の言語」「民俗と展
望」の四課題について討論され、
翌日の日本民俗学会記念研究発表
会でも、日本民俗学会が主催して
いる課題について論じられた。

二日間の討論を通じて浮かびあ
がったのは日本固有性問題の同
じ、柳田の学問の価値は、現在も



有効か、といった問題で、このこ
とをふまえてアジア近隣諸国との
協力による比較民俗学への広が
りを通して柳田学の新しい可能性が
追求された。

シンポジウムの発言の中で現代
の関心を最も的確にあらわしたの
は、柳田三民であった。柳田氏
は「ネビロ・スミス」が日本人
の固有な自然観を「内なるもの」
の固有性として捉えている（その
の観念）と十分なるものへの追
求として提示し、自然と生活の

は、なる比較検討が必置である」と
いうことである。

柳田が「先祖の神」を「新国
学」三編で書き、日本民族・文化の
中心となる固有信仰・祖霊信仰を
打ち出したのは、敗戦によって精
神の荒廃した日本人に生き残らせ
るためのたぐひであるが、この
祖霊信仰も「ネビロ・スミス」の
固有信仰、仏教思想との比較から
日本固有のものとは異なる（ナ
ウ・スミス・ド・ペン・藤井正雄氏）
と指摘された。また、柳田の「神
と祖霊」は「神観念」の近隣諸国との
比較から、日本の固有性を主張
しても意味がない。日本の民俗学
は「内なるもの」を「外なるもの」
のなかに置くべきではない。また、大
本氏は「日本の言語」の課題を
総括して「日本の特質を考察する
ことへの批判である。例えは、
「アフリカ・アフリカの第三世界
の言語」は、なせか、

生誕百年記念 セミナーから

柳田が抱いた心を理解する、日
本の固有性問題を感じてい

柳田が抱いた心を理解する、日
本の固有性問題を感じてい

（増大記者）